

## ハ短調ミサ曲はどのようにして書かれたのか？

### 2. コロレド大司教とモーツァルト

1772年、ザルツブルクの大司教に就任したコロレド伯爵はまもなく大司教領の近代化に着手し、様々な分野で儉約と合理化を推し進めました。そのひとつが教会におけるミサ典礼の短縮化です。モーツァルトが1776年9月にボローニャのマルティーニ師（幼少期における対位法の先生）に送った手紙では「ザルツブルクでは大司教が執り行う盛儀ミサでさえ45分の時間制限があり、特別な作曲の勉強が必要です」と書かれています。入祭唱、詩編唱、アレレヤ唱、祈り、旧約や福音書、書簡（使徒書）の朗読、聖体拝領などから成るミサの時間が全体で45分では、ミサ曲の演奏にかける時間は20分を越えることはできず、ここでのミサ曲は言葉数が最も多く作曲家の腕の振るいどころである「信仰宣言」を欠く（朗読で行う）、ミサ・ブレヴィスの形を取らざるを得ません。

一方でコロレド大司教はそれまで無給だったモーツァルトを有給の宮廷楽師長に昇格させて、毎年の旅行も許可するなど一定の待遇を与え、それに応えてモーツァルトも交響曲や宗教曲を量産しました。しかしそれも長くは続かず、大司教のイタリア人最良により次々とイタリア人が宮廷楽長に迎えられたため、副楽長である父親レオポルトに楽長昇任の道は開かれず、改革により宮廷楽団の活動範囲が狭められたモーツァルト親子の不満は次第に高じてきます。

コロレドから見ればモーツァルト親子が毎年数ヶ月の休暇を使ってヨーロッパ各地を旅し、しばしば帰国を延期した上に旅先で就職活動をしていることを快く思いません。こうしたことからモーツァルトにとっては薄給でしかも窮屈な宮廷楽団の勤務は、司教への不満からザルツブルクという「田舎暮らし」そのものに対する不満を募らせていったようです。1777年8月、彼は宮廷楽団を辞職しました。ちなみにこの間モーツァルトの作曲したミサ曲は13曲、交響曲は22曲にのぼります。

同年9月から79年1月までモーツァルトはマンハイムからパリへ旅行します。目的は新たな就職先探しですがこれは叶えられず、パリでは同行した母親が死去するという不幸にも見舞われました。しかし一方でマンハイムの宮廷楽団員と親しく交流するなどの収穫もあります。

1779年1月、帰国したモーツァルトは（やむなく？）ザルツブルクの宮廷楽団に復職願いを提出し、宮廷オルガニストに任命されます。この間にも「戴冠ミサ」や交響曲、協奏曲などを作曲しましたが、ここでの生活はやはり彼にとって耐えがたいものであったようです。というのもザルツブルクでは彼のオペラを上演する機会が全く与えられなかったからです。モーツァルトにとってオペラはイタリア旅行で培った自らの腕をふるい、大勢の観客に名前を売り込む、そして多くの報酬を得る為の最大のチャンスだったのでしょう。そこに飛び込んで来たのがバイエルン選帝侯（ミュンヘン）からの作曲依頼でした。彼の地の宮廷楽団にはマンハイムから侯とともに移ってきたメンバーも多く、モーツァルトは渾身の力でオペラ「イドメネオ」を書き上げました。

オペラ上演のため休暇でミュンヘンに滞在していたモーツァルト親子はなかなかザルツブルクへ戻ろうとしませんでした。そのうち今度はコロレド大司教が父親の病氣見舞いでウィーンに出かけ、そこからモーツァルトをウィーンに呼んだのです。これは大司教が自慢の楽団の名手をウィーンの貴族に聴かせるためでした。1781年3月、モーツァルトは単身ウィーンに旅立ちます。

ウィーンで彼はヴァイオリンソナタやアリアを作曲し何度も演奏会を催しますが、大司教は彼に報酬を与えません。そのうち唯一の公開演奏会でモーツァルトは92名の大オーケストラを使って自作の交響曲を演奏し、大好評を博しました。この頃から彼は生まれ故郷であるザルツブルクと決別してウィーンで活動する決意を固めたようです。「たしかにここ(ウィーン)は素晴らしいところで一僕の仕事に世界一合っています」(4月4日付け父宛書簡)

こうして5月9日、帰国命令を巡って大司教と口論した挙げ句、6月8日にモーツァルトはザルツブルク宮廷楽団を解雇されたのでした。

モーツァルトが教会付きの音楽家として仕事をしたのは、後にも先にもザルツブルクでの宮廷楽師長としての合計9年あまりの期間のみです。時間や規模の制約に悩まされながらも、彼はミサ曲を始めとする多くの教会音楽を作曲しました。後に創られるはずの「ハ短調ミサ」や絶筆となった「レクイエム」などの名曲を生み出す土壌は、ここザルツブルクでの生活にあったと考えられます。この地で彼は研究・作曲・演奏を通じて、宗教音楽のイロハを学んだことでしょう。そんな思いから、ここまでザルツブルク時代のモーツァルトについて頁を費やしてきました。

### 3. ウィーン移住と「バッハ・ヘンデル体験」

1781年から亡くなる91年までの10年半がモーツァルトのウィーン時代です。フリーランスの作曲家、演奏家、音楽教師として生計を立てながら、この時代の初期に彼は作曲技法に関する知見を豊かにする機会を得ました。それがいわゆる「バッハ・ヘンデル体験」です。

ウィーンの貴族で音楽愛好家であったゴットフリート・ヴァン・スヴィーテン男爵は、長年オーストリアの外交官を務め、外国赴任中にバロック音楽の楽譜収集に熱中しました。とりわけ最後の赴任地であったベルリンでは大バッハの息子カール・フィリップ・エマヌエル(プロイセンのフリードリヒ大王に仕えた)や弟子たちと親交を結び、多くのバッハ作品の楽譜を入手しました。

彼はコレクションをウィーンに持ち帰り、毎週日曜日に自宅で催す私的な演奏会で演奏して友人たちに紹介したのでした。1782年はモーツァルトがこのサロンに足繁く通っていた時期です。「僕は毎週日曜日の12時にヴァン・スヴィーテン男爵の所へ行きます。－そこではヘンデルとバッハ以外は何も演奏されません。－僕は今バッハのフーガを集めています」(4月10日付け父宛書簡)

男爵の許でモーツァルトがバッハのどのような音楽を知ったかは明らかではありませんし、彼が幼い頃から対位法を学んでいたことも事実です。しかしこの年以來彼は純粹のフーガ作品を多く書くようになったほか、弦楽四重奏曲や宗教曲、交響曲、オペラなどの作品に、この時代には忘れかけられていたポリフォニーを自己の音楽に取り入れるようになります。

その年から翌年にかけて書かれた「ハ短調ミサ曲」にも、フーガやアツラ・ブレーヴェ、付点リズム、二重合唱などバッハ・ヘンデル体験によるバロック音楽の影響が直にはっきりと刻印されており、1789年に男爵の依頼でヘンデルの「メサイア」を編曲(楽器編成や声部の変更の他、フレーズの終わりに「モーツァルト節」がちよこつと顔を出すなど面白い編曲です)するなど、モーツァルトのバッハ・ヘンデルに対するリスペクトは明らかです。

#### 【後記】

「ハ短調ミサ曲」作曲に至るまでのモーツァルトの音楽体験をたどってみました。筆者には少しずつその過程が見えてきたような気がしますが、皆様はいかがお感じでしょうか。次回はこの作品自体が書かれた経緯を見てみようと思っています。(新井)